

2-2. 連続手法の抽出

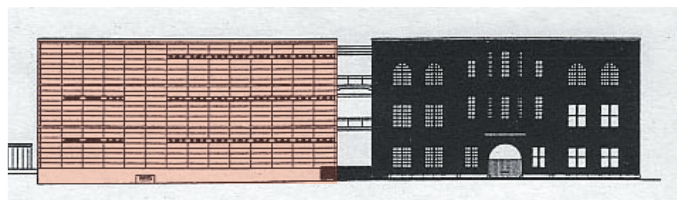
2-2 では、収集した 54 件の増築事例に見られる、増築外観に既存外観との連続性をもたらす手法を抽出した。
その結果、以下の 7 つの手法が確認された。

(1) 高さを揃える

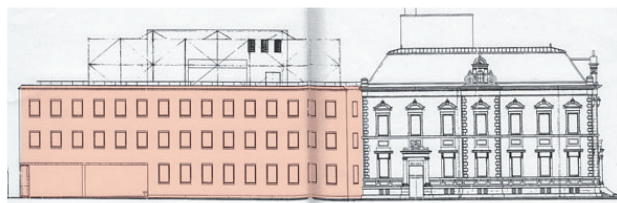
既存部分と増築部分の立面高さを揃え、構成 (composition) を連続させている事例が見られた。

新風館では、既存部分と増築部分の建物高さが揃っている。中京郵便局庁舎では、屋根を含めた建物高さは異なるが、壁面高さ (軒高) が揃えられている。

また増築建物が高層部と低層部に分けられ、低層部の高さを既存建物と揃えているものもあった。



新風館 立面図



中京郵便局庁舎 立面図

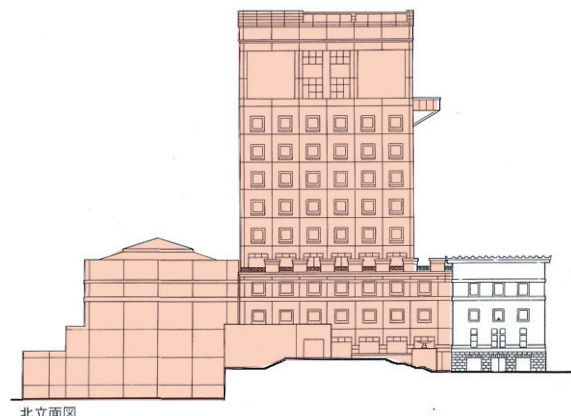
* 赤く塗られた部分が増築

(2) 見立てる

見立てにより、既存部分と増築部分を統語法上の関係において連続させているものがあった。

例えばお茶の水スクエア A 館では、既存部分を基壇部に見立て、胴部・頂部として高層棟を増築している (3 層構成への見立て)。

また東京大学工学部 6 号館は、既存部分を「壁」に見立て、「屋根」として上部に 1 層分の増築を加えた例である (壁と屋根への見立て)。

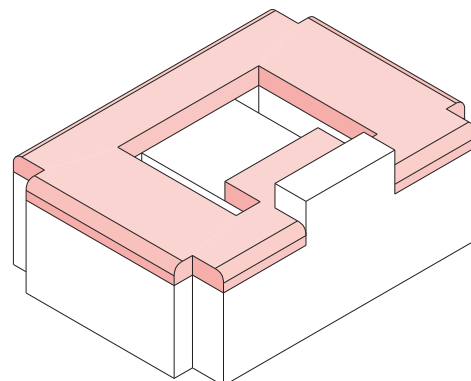


北立面図

お茶の水スクエア A 館 3 層構成に見立てる



立面図



ボリューム

東京大学工学部 6 号館 屋根に見立てる

* 赤く塗られた部分が増築

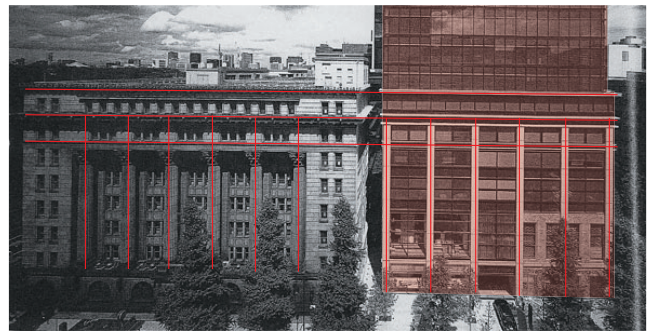
(3) 構成を揃える

既存部分と増築部分で、立面の構成を揃えているものがあった。統語法の連続。

例えば、日本橋三井タワーの低層部では、既存部分のコーニス・列柱構成を連続させている。

明治安田生命ビルも同様である。

高島屋日本橋店の7,8階部分では、列柱上の付柱・庇・柱間の開口部という構成を、水平に連続している。



明治安田生命ビル低層部



高島屋東京支店 7,8階



日本橋三井タワー低層部

* 赤く塗られた部分が増築

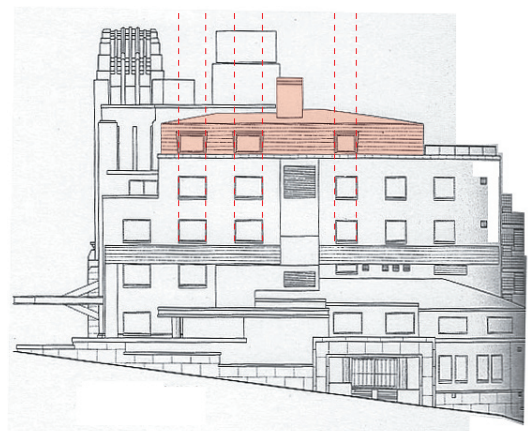
(4) 分割の間隔・リズムを揃える

既存部分と増築部分で立面分割の間隔・リズムを揃えているものがあった。

例えば、山の上ホテルでは増築部分の開口部を既存部分と同間隔で配している。

横浜税関本関では、ガラススクリーンによる面の分割が、既存立面の開口部による分割と連続している。

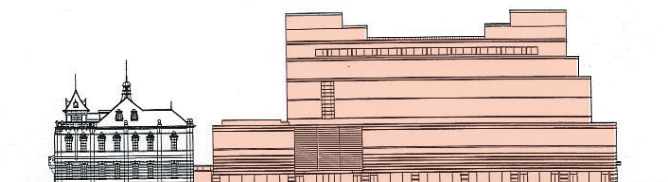
京都府京都文化博物館では、既存建物壁面の横ストライプのパターンを増築部分にも延長している。



山の上ホテル本館



横浜税関本関



京都府京都文化博物館

* 赤く塗られた部分が増築

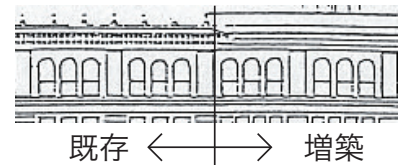
(5) 要素の形態を揃える

増築外観に、既存建物の要素（柱、開口部、装飾など、建築を構成する部分）を同じ形態で用いているものがあった。

例えば、高島屋東京支店の増築部分 8 階では、既存建物 8 階のアーチ型開口を同じ形態で用いている。

また大阪ガスビルでは、既存壁面の半楕円断面の付け柱が、増築部分のファサードでも用いられている。

お茶の水スクエア A 館においては、解体復元した既存立面の装飾帯を、増築部分まで延長して用いている。



高島屋東京支店 8 階立面図 部分



既存

増築

大阪ガスビル 付柱写真



増築

既存

お茶の水スクエア 装飾帯

(6) 要素の形態を相似にする

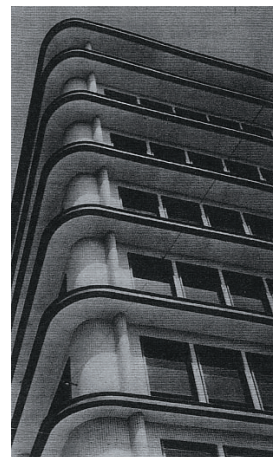
既存建物の要素（柱、開口部、装飾など、建築を構成する部分）を同じ形ではないが、それに近い相似な形態で増築外観に用いているものがあった。

大阪ガスビル増築部分では、既存建物の大きなカーブを描くコーナー部分と相似な、小さくカーブしたコーナーとなっている。

横浜税関本関の増築部分・日よけガラススクリーンは、既存の開口部の形と大きさを似せている。

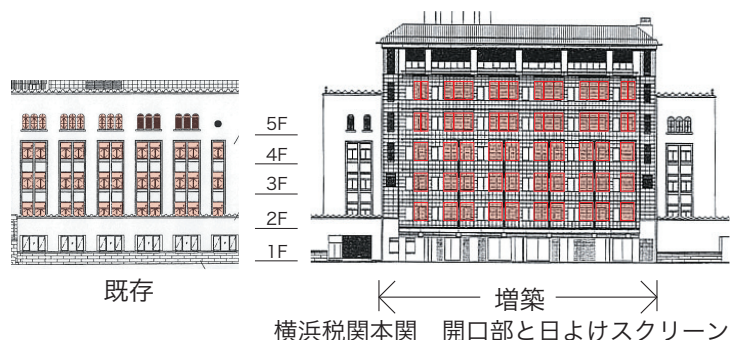


既存



増築

大阪ガスビル コーナー部の比較



既存

← 増築 →

横浜税関本関 開口部と日よけスクリーン

(7) 素材を揃える

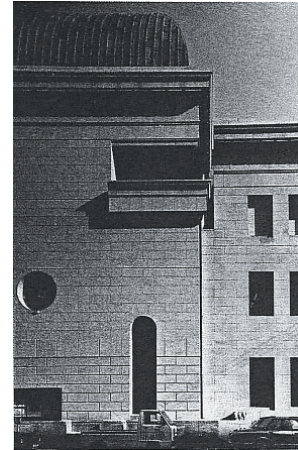
既存建物の外観と、外装材をそろえているものがあつた。

立教大学図書館では、既存建物の煉瓦という素材を増築部分でも用いている。構造主体であるコンクリート壁との間に空気層をとり、二重壁をつくっている。

神戸市立博物館の増築では、既存外壁と同じ北木産花崗岩を使用している。表面仕上げにおいても、ジェットポリッシュと呼ばれる、石の表面を熱して凹凸をつけた後軽く研磨する方法で、既存の小叩き仕上げとなじませている。



立教大学図書館 立面図



神戸市立博物館

2-3. 増築の 4 類型

収集した 54 の事例には、2-2 で抽出した連続手法が用いられているものと、どれも用いられておらず、新旧の外観が完全に対立するものがあった。

またボリュームに着目すると、渡り廊下などで既存ボリュームと増築ボリュームが分節され 2 つの建物のようにになっているものと、両ボリュームが密着して 1 つの建物になっているものが見られた。

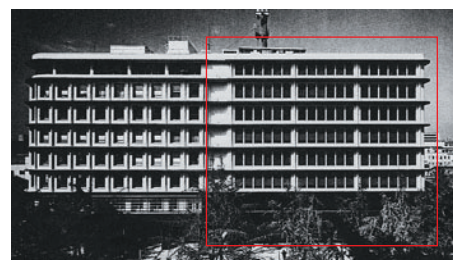
そこで 54 事例の増築部分の外観について、ボリュームが密着して 1 つか分節されて 2 つか、また 2-2 で見出された連続手法が用いられているかどうか、を調べ、増築事例を 4 つのタイプに分類した。

タイプ 1. 調整された 1 ボリューム型

増築外観が既存外観との連続性を持ち、両者が 1 つのボリュームとなっているタイプ。

以下の 12 例がこのタイプに分類された。

- ・高島屋東京支店
- ・大阪ガスビル
- ・倉敷アイビースクエア
- ・東京大学工学部 6 号館
- ・山の上ホテル本館改修
- ・姫路市立美術館
- ・お茶の水スクエア A 館
- ・DN タワー 21(第一・農中ビル)
- ・北九州市旧門司税関
- ・神戸税関本関
- ・横浜税関本関
- ・大阪証券取引所ビル



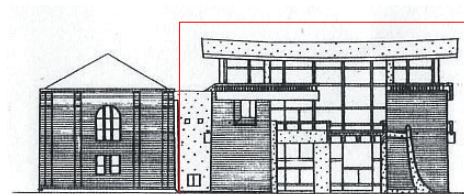
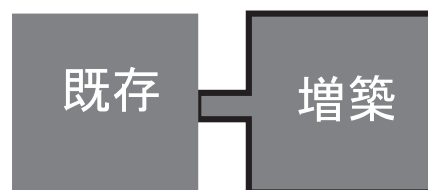
大阪ガスビル外観
赤枠内が増築部分

タイプ 2. 調整された 2 ボリューム型

増築外観が既存外観との連続性を持ち、両者が 1 つのボリュームとなっているタイプ。

以下の 11 例がこのタイプに分類された。

- ・立教大学図書館
- ・中京郵便局庁舎
- ・横浜開港資料館
- ・神戸市立博物館
- ・長瀬産業本社ビル
- ・京都府京都文化博物館
- ・静嘉堂文庫美術館
- ・新風館
- ・明治安田生命ビル
- ・横浜アイランドタワー
- ・日本橋三井タワー



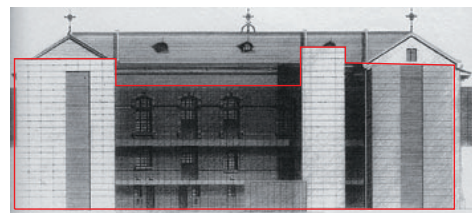
立教大学図書館 立面図
赤枠内が増築部分

タイプ3. 対置された1ボリューム型

増築外観が既存外観との連続性が無く対立しており、両者が1つのボリュームとなっているタイプ。

以下の14例がこのタイプに分類された。

- ・ 東京大学御殿下記念館
- ・ 日本火災横浜ビル
- ・ エスカミューズ
- ・ ミュージアムパーク アルファビア
- ・ 東京大学工学部1号館
- ・ 大阪松竹座
- ・ 大手町野村ビル
- ・ 横浜赤レンガ倉庫1号館・2号館
- ・ 国立国際子ども図書館
- ・ 交詢ビルディング
- ・ 京都大学百周年時計台記念館
- ・ 「ルネスホール」旧日銀岡山支店改修
- ・ COCON 烏丸
- ・ 参議院参観・テレビ中継施設



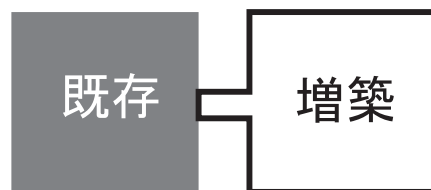
国立国際子ども図書館 立面図
赤枠内が増築部分

タイプ4. 対置された2ボリューム型

増築外観が既存外観との連続性が無く対立しており、新旧建物が分節され2ボリュームとなっているタイプ。

以下の16例がこのタイプに分類された。

- ・ 銀行会館
- ・ 第一銀行本店新館
- ・ 京都市美術館収蔵庫
- ・ 金沢市立図書館
- ・ Villa del sol
- ・ 京都大学文学部博物館
- ・ ホテルニューグランド
- ・ 大原美術館本館増築
- ・ 佐倉市立美術館
- ・ 千葉市美術館・中央区役所
- ・ 大山崎山荘美術館
- ・ 海岸ビル
- ・ 東京大学総合研究博物館小石川分館
- ・ 立教大学第1食堂
- ・ 日本工業倶楽部会館
- ・ 三菱信託銀行本店ビル
- ・ 東京大学工学部2号館

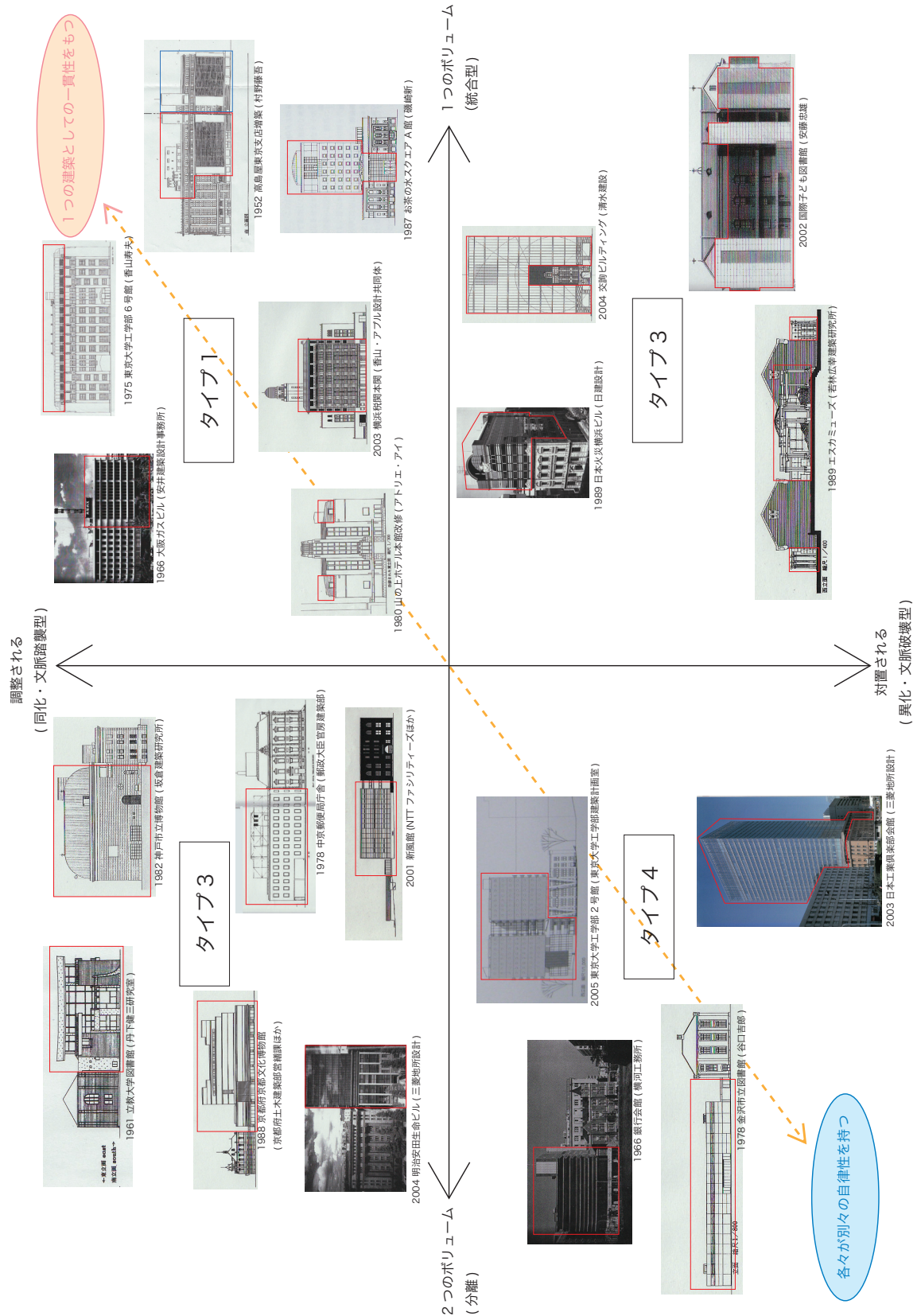


金沢市立図書館 立面図
赤枠内が増築部分

事例を増築外観の既存外観との関係から4つの類型に分類した。

縦軸に「調整する-対置する」を、横軸に「ひとつのボリュームになる-ふたつのボリュームになる」をとると、以下のようなマトリクスとなる。

右上にいくほど「1つの建築としての一貫性をもつ」という性格があり、左下に行くほど「各々が別々の自律性を持つ」という性格がある。



第 3 章

「調整された 1 ボリューム型」の外観

3-1. 事例分析

前章 2-3 において、収集した事例を既存外観と増築外観の関係から 4 類型に分類した。

増築建築の外観と既存建築の外観との連続性は、連続の手法がもちいられ、かつ一体のボリュームとなっている、「(1) 調整された 1 ボリューム型」が最も高い。

そこで本章では、「(1) 調整された 1 ボリューム型」の増築事例の外観分析を行い、そこで用いられている方法を明らかにする。

外観分析の視点は、増築部分の外観が、既存部分とどのような関係にあるか(何が同じで、何が異なっているか)に着目している。

また資料は、収集した図面や写真、見学調査によって行った。時間の都合上、見学調査ができない事例があった。

前章で収集された事例のうち、「(1) 調整された 1 ボリューム型」は 12 事例あった。

このうち、北九州旧門司港税関(設計:大野秀敏+アプル総合計画事務所,1994)については、計画に際して保存検討委員会による外観復元の提言があり、増築の前提条件が特殊であるため、分析対象から除いた。

また大阪証券取引所ビルは、十分な資料を収集することができなかつたため、扱っていない。

最終的に、以下の 10 事例について外観の分析を行った。

	建物の名称	設計者	竣工年	掲載年
(1)	高島屋東京支店増築	村野・森建築設計事務所	1952	1953
(2)	大阪ガスビル	安井建築設計事務所	1966	1966
(3)	倉敷アイビースクエア	浦辺建築事務所	1974	1974
(4)	東京大学工学部6号館増築	香山壽夫	1975	1975
(5)	山の上ホテル本館改修	アトリエ・アイ	1980	1980
(6)	姫路市立美術館	創設計事務所	1982	1983
(7)	お茶の水スクエアA館	磯崎新アトリエ	1987	1988
(8)	DNタワー21(第一・農中ビル)	清水建設一級建築士事務所ほか	1995	1996
(9)	神戸税関本関	建設省近畿地方建設局営繕部 日建設計	1999	1999
(10)	横浜税関本関	香山・アプル設計共同体	2004	2004

(1) 高島屋東京支店

設計：村野・森建築設計事務所

東京都中央区

増築部分：1952年竣工

既存部分：1933年竣工



中央通り南側から見た外観

a. 背景

1933年(昭和8年)、高島屋東京支店は東京・日本橋に竣工した。

このとき完成したのは、現在の建物の中央通り側約3分の1にあたる部分である。鉄骨鉄筋コンクリート造、地下2階・地上8階・延べ約24,800m²の日生館と、これに接続する延べ約4,600m²の高島屋事務館からなっている。

設計は高橋貞太郎による。昭和のはじめに高島屋と日本生命による「東洋風」をモチーフとしたコンペの1等当選案である。

その表現は、戦前の百貨店建築として典型的な折衷派様式で、舟肘木や大瓶束などの東洋的モチーフを扱った柱頭やモールディングがみられる。日本の百貨店で初めて全館冷暖房装置を備えるなど、三井本館とともに贅をつくした2大建築物といわれた。

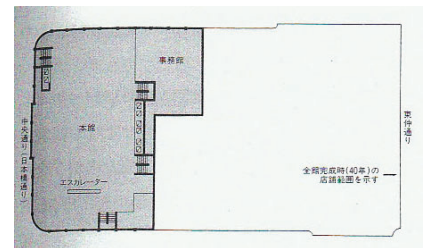
1937年に増築が計画されたが、戦争により地下工事ができあがった段階で工事は中断していた。

1952年、村野・森建築設計事務所の設計により、地下1、2階部分が完成したまま中断していた本館東側のうち南半分に新館の増築がなされた。

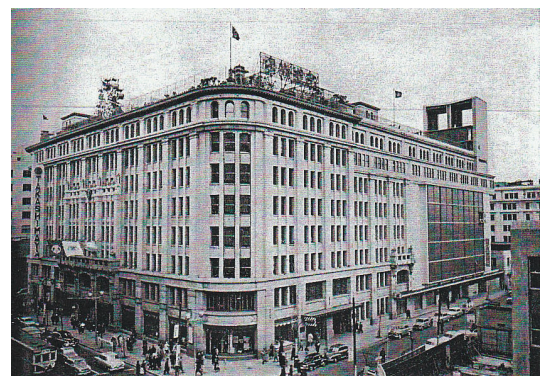
その後、1954年、1963年、1965年に大規模な増築がなされて現在の高島屋東京支店となっているが、本節では1952年になされた増築部分を扱う。



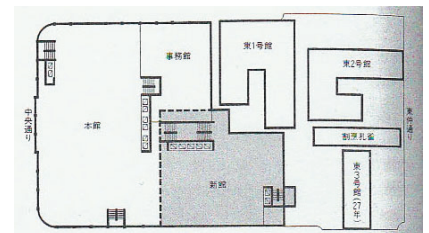
1933年の竣工時 中央通り北側より



塗りつぶし部分が1933年完成部分



1952年の竣工時 中央通り南側より



塗りつぶし部分が1952年完成部分